

武蔵野日曜集会 聖霊降臨節祈祷会

聖霊の力

――エペソ書第3章5～19節――

1992年6月7日(武蔵野)

小池辰雄

相対界にしながら絶対的な現実を歩く 聖書の体現者 聖霊の愛 脊椎カリエスの癒し 「○に十」の徴 キリストという実体をいただく キリストの活ける作品 聖書を読みながら祈りの世界に入る

【エペソ3】

5 この奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者と共に顕されし如くに、前代には人の子らに示されざりき。6 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。

7 我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に随いて我に賜う恵の賜物によるなり。8 我は凡ての聖徒のうちの最小き者よりも小き者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、9 また万物を造り給いし神のうちに、世々隠れたる奥義の経綸の如何なるもの乎をあらわす恩恵を賜わたり。10 いま教会によりて神の豊かなる知恵を、天の処にある政治と權威とに知らしめん為なり。11 これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、神の定め給いし御旨によるなり。12 我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、臆せず疑わずして神に近づくことを得るなり。13 されば汝らに請う、わが汝等のために受くる患難に就きて落胆すな、是なんじらの誉なり。

14 この故に我は天と地とに在る諸族の名の起るるところの父に跪ずきて願う。16 父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、17 信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、18 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何許なるかを悟り、19 その測り知る可からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

【使徒1】

8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん。



● 相対界にしながら絶対的な現実を歩く

「⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力^{ちから}をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極^{はて}にまで我が証人^{あかし}とならん。」(使徒1:8)

世の中の論文というものは皆、「何々について、に関して」と書いてある。

「聖書は我について証しするものなり」

と。あれは「我について証しする」ではない。「我を証しする」です。「について」語るということは間接なんです。それを対象化している。対象化して、「について」と言っている世界は、これは単なる相対界だ。ところが、信仰の世界は絶対界なんです。我々は相対界に生きています。相対界に生きていながら、絶対的な現実を歩くのが本当の世界です。キリストはそういう絶対界を自分で現じていた。イザヤ書35章を表現していた。体^{からだ}で現ずる。

教会ではよく「宣教」という。キリストの教え^{あかし}を宣伝する。私は宣教という言葉は嫌いなんだ。「伝道」はまだいい。道を伝える。けれども、一番大事なのはこの「体現」なんです。体現が本当に証^{あかし}ということなんです。だから、これを「身証^{しんしょう}」という。身^{からだ}で証しする。口でものを言います。手足で動きます。口でものを言っても、口でものを言う世界が――福音の世界は意味ではない――やつぱり力なんです。

「ラザロよ、出で来たれ!」

と、これは口でものを言っている。ところが、死んでいるラザロが出てきた。福音書は全部これは体現の世界なんです、キリストの世界は。口でものを言おうと、手足で行動しよう。と。体現ということが、これが本当の現^{うつ}の世界です。全存在で体現する。

お芝居をしてらっしゃる方があるけれども、真似ごとだったら、お芝居もダメなんだ。その技もやはりその精神を体現している役者でなければ本当の役者ではない。書かれたるものも、「について」書いてあるところの論文というのは大したことではない。ところが、西田さんみたいな哲学者になると――あれは哲人と言いたい、学者じゃない。プラトンもそうだ――これは書いていながら、全部それは告白なんです、哲学であろうと。文学はもちろんそう。ゲーテは、

「自分の文学は告白文学だ」

と、彼自身が言っている。

それが、分裂のない直の世界です。直^じかの、即の世界、即如の世界です。「即如」なんていう言葉は、私は無教会にいた時に一遍も聞いたことがない。柳宗悦という人――民芸を非常に評価した人です――が言っていることは即如の世界を語っている。だから、普通の聖書の注解書を読むよりか、柳さんのものを読んだ方がよっぽど楽しい。第一流の坊さんの書いているものも皆そうです。だから、文章を書く人も、「について」書いているうちはダメなんだ。柳田邦男がノンフィクションのものを書いている。彼の書きかたは、やつぱりそういうところがある。客観的な事を書きながら、グツときている。単なる「について」



の世界ではないんだ、彼の文章を見ていると。

我々も何をするにつけても、体現でなければダメなんです。口でものを言おうが、何か事をしようが、歌を歌おうが。身体で現じている。

「どうやったら良く歌えるか、こここのところの技術はどうだ」

とか、二義的にはそういう練習は要るでしょうけれども、練習の次元がそのまま現れたってダメなんだ。もうひとつ奥の世界から、その練習の技能が自然に現れるようなことになったら、本ものになる。それが、

「学を学びながら絶学しなければ本当の学でなくなる」

ということ。みんなそうなんです。

だから、聖霊についていくら語ったってダメなんだ。聖霊については語っている人はあるよ、注解書は。「について」しているうちはダメ。残念ながら、一流の先生方もその点ではズレている。

●聖書の体現者

万葉集の有名な言葉に、

「踏^{しな}んでいる石が宝玉のように光る」

(信濃^{しなの}なる千曲^{ちぐま}の川の細石^{さざれ}も 君し踏^{ひろ}みてば玉と拾はむ)

というような言葉がある。私が聖霊を受けた時が正にそうなんだ。阿蘇の自然が光っている、何と美わしいなあと思った。不思議でしうがなかった。

とにかく、聖霊の世界は体現の世界です。使徒行伝が体現、いわんや福音書が体現です。パウロの書簡、新約聖書はみな体現の角度から書かれている。だから凄いんだ。

皆さんも、どうぞ、体現者^{てげんしや}になってください。福音は、体現者、聖書の体現者となること。それは、十字架を本当に受けとって、聖霊がやってきて、これが力となったら、これは体現せざるを得ない。自然に自ず^{おの}から体現している、意識しなくとも。

いわゆる手島さんの大グループであろうと、召団であろうと、属するところは何だっていい。本当にキリストを体現しているかどうか、それだけが問題なんだ。どの教会に居ようとは何だっていい。

あなた方一人ひとり、それだけの課題と光栄と使命を荷なっているんだから、福音というのは。しかも、力がくるから楽しいんだ、楽なんだ。パウロはこれだけ捕まえられていながら、

「いよいよ追求する」

と言っているでしょ。それは、追求せざるを得ないんです。人間は、「これでいい」なんていう所はひとつもない。

「汝ら、父の全きが如く全かれ」



とキリストが言ったね、あんなことを水を割らずに。我々がどうして全くなかなれるか。キリストは我々に不可能なことを要求して「全かれ」という。

「神さまは、善き者にも悪しき者にも陽を照らし、直き者にも直からざる者にも雨を降らす。ちつとも区別しないでやっているじゃないか。それが全さというものだ。
依怙^{えこひいき}贖^{いしな}するのではないぞ。それぞれをみな愛しなさい」

と。ただ、愛する愛し方は人によつて違うさ。

●聖霊の愛

しかも、その力の質は何かというと、今言った愛なんです。「聖霊の愛」ということを手島さんが言ったが、あれは名言です。

素晴らしいものは、素晴らしいと言ったらいい。みな私心があるから、日本人というのはケチなんだ。すぐ、人のケチをつけたり、足をひっぱったりする。良いものは良い、美わしいものは美わしい、正しいものは正しいとしなくては。パウロがそう言っているじゃないか。

パウロというのは凄い幅を、深さと高さを持つている。とにかく、パウロという人物は本当にキリストの証人としてパウロ以上の者は、ちよつと考えられない。だから、新約聖書は凄いんです。何といつてもパウロが中心になっている。

福音書は別だよ。キリストはもう比較にならないひとだから。比較を絶しているひとだ。パウロが降参したひとだから。パウロは降参させられてしまったんだ。

「何をやっているか!」

と、キリストに言われて。楽しいね、ああいふところを読むと。キリストにやつつけられて、そして本当に、

「我はキリストの囚人^{めしうど}である」

と、僕^{しもべ}とも言わないで、囚^{とら}われ人だと言った。

絶対者に囚われると、これが本当の自由の世界なんだ。間違えては困る。「自由、自由」と普通の人が言っている自由なんて、ひとつも自由でない。

これが聖霊の世界なんです。力を受ける。

「福音は言^{ことば}にあらず、力なり」

とパウロが言っているのは、そのことなんだ。敵を倒す力ではない、敵を救い上げる力だ。何者でも救い上げてしまう力なんだ。その救い上げる力の質は即ち愛だ。

「愛は一切に勝つ」

と、さつきも言ったとおりです。ラテン語で、

「アモール オムニア ヴィンキット」

という。ヒルティが好きな言葉で、ヒルティの墓碑銘にそう書いてある。「愛は一切に勝つ」



ということ、愛はすべてのものを救いあげるといふことで、

「敵をも愛せよ」

とキリストが言ったのがそのことだ。十字架上で敵をも愛して、

「彼らを赦してやってください」

と言うんだから。これも、身体でもって言っているんだ。血を流しながら言っているんだから、大変なことだ。

我々は自分では十字架は負えない。御霊の力がくれば、負える。もうあり難くしようがないよ、この聖霊というのは。力もあるし、智慧もあるし、生命もあるし、何でもある。「聖霊」というと、何か聖き霊で、

「さあ困ったな、私は汚れているから」

なんて思う。何を言っているんだ。贖われているんだから、そんなことは心配いらぬ。聖霊の内容はその素晴らしい愛です。

「その愛の広さ高さ深さのいかにかりなるかを」

と、パウロがエペソ書で言っているでしょ。あれは、やりきれなくてパウロは言っているんだ。パウロは頭でなんか言っているやしない。やりきれなくて、ああいうことを言っている。

●脊椎カリエスの癒し

私も、自分の過去のことなんか言いたくはないけれども、この御霊がきてしまったら、不思議なことがいくらか起きてしまつて、本当に何人助けたか分からんもの。魂の世界も助けたし、身体も助けたし。

その第一号は、小諸のA・Kさんだ。脊椎カリエスが一晚で治ってしまった。聖書を読みながら祈つて、そして^{あんしゅ}按手してあげた。異言が出てしようがなくて、異言が止まらない。それから、私は静めてあげたけれども。毒気みたいなのを吐いたよ。窓を開けて出した。そうしたら、すっかり軽くなつてしまった。

「先生、身体がすっかり軽くなつてしまつて、どういふんですか、これは」

なんて。私もおつたまげてしまった。御霊の力だから。それまでは、二時間くらい起きていると、また寝なければならぬような人だったんだ。

清瀬では、まだペニシリン以前に、肺病にかかると大体死ぬのが^{おおかた}大方なんだ。だから、療養所というのは暗い。

「いつあの人は倒れてしまうだろうか」

なんて。ところが、私が行つて話して按手したら、幾人もそれで身体が救われてしまった。私は、病気がどういふようになつてゐるのかは知らないが、とにかく、病勢が動かなくなつてしまった。そして元気になる。

「貴方は退院してよい。どうして、こんなに良くなったのか？」



と、医者の方でびっくりする。

そうかと思うと、お母さんに溺愛されてしまつて、夜中になると、妙なことを口走る女性がいた。

「あなたのことをちよつと言つてごらん、どういう生い立ちだい？」

と聞くと、

「実は13才の時に、お母さんが亡くなりました。お母さんはとても私を愛していました」

と言う。ところが、その愛が溺愛では困つた。お母さんの魂がその人の中に入ってしまった。だから、その中で夜中に言うのはお母さんの声なんだ。乙の人がそういうことになって、甲の人がびっくりして

「何だか、おかしいな」

と。私は按手して、

「ああ、そうですか。お母さん、お母さん、ご安心ください。天界へ行つてください。聖名によつて出でよ」！

と、天界へ行くように私は祈つた。

「この人はもうキリストの力でいきますから」

と。その晩からピタツと止んでしまった。だんだん身体が良くなつてきた。

いろいろ不思議なことがあつた。話すところいろいろあるけれども。狐に憑かれたような人で、こんな恰好をしてしまう。

「聖名によつて出でよ！」

と、狐の霊を出すと、ガタンと倒れた。それから今度は按手して、キリストの御霊を入れた。いろんな事があつた。今は、あなた方は割合に質がいいから、そういうことが起きないんだけれども（笑）。質が悪いと、それが起きる。

あるクリスマスの時には、

「先生の家の方に来たら、先生の家屋根の上にスーツと銀の柱が立っていました」

「そうかい」

今日は何か起きるなと思った。このクリスマスでは、私の回りに天使がグルーツと立ってしまった。皆の回りに二人づつ白い羽の天使が立った。杖をついて来た人が、帰りには杖が要らなくなった。肺がおいしい人が、肺が治つてしまった。天界の幻を見たり、天界の音楽を聴いたり、とても大変だった。

「いや、あの音楽はとても地上の音楽ではないですよ」

なんて。

そういう現象を受けた連中がこの集会から逃げていつてしまった。「何だ!?」というんだ。聖霊の世界を本当に、この聖言を身に体して、身に付けないからおかしなことになる。



「あの現象はちょっとおかしいな、行き過ぎたのではないか？」
なんて。そうじゃない。

内村鑑三先生すら、それでもって行き過ぎたと思った。止めてしまった。明治6年にすごいことがあったんだ、築地でもって。その集会では、道行く人が何かその中に吸い込まれるような大リバイバルが起きた。

ヒルティが言っている。

「聖霊が臨むときには、ちょうどバーツと火が燃えるようだ」

と。その火を内住的な常住的な、常燃の火に静かに燃やさなければダメなんです。静かに燃えていると、これが時あつてか爆発する。そういうような事態でなくてはダメです。だから、私は火山みたいなんだ。いつ爆発するか分からない。あなた方も火山になつてください。

この頃は、日本がおかしいものだから、雲仙の火砕流が止まない。もう一年以上も。大変なことだ、これは。やっぱり、あれは日本に対する警告だ。

「何しているか！」

と。天来の火が流れているようなものだ。

いつかのU君の異言、3、4人で祈っていたら、U君が凄い異言になったから、

「君、その異言を書いてごらん」

と言ったら、まるでアラビア文字みたいなものをガーツと書いた。

「訳してごらん」

と言ったら、日本語に訳した。

「パウロ、これを言う。……日本は早く悔い改めろ、世界は危ない……」

と、パウロが天界から執り成している。いろんなことを言っている凄い異言だ。私はそれをとつてある。

●「○に十」の徴

そういうわけで、手島さんには確かに燃えていた。人間手島にはいろんな面があった。そんなことはどうでもいいよ。手島君も私も、両方とも欠点だらけの人間だ。いいよ。しかし、この聖霊の火は、何ものをもつてもこれを否定するわけにはいかん。

「この火燃えたらんには、何をか望まん」

とキリストが言われたのはそのことです。だから、皆さんも、今日は確かに点火されていると思うから、夜中でも朝でもいい、とにかく深く祈ってください。祈り入ってください、キリストの中に。

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

という、中世の神秘家の世界に自分で入る。アッシジのフランシスとか、タウラーとか、



いろいろながいる。誰でもが無条件に入れる世界が一番素晴らしいんです。十字架を受けとることと聖霊を受けとること。これは無条件の世界です。条件はひとつも要らない。

その聖霊の力でパウロが動いていたから、

「⁵この奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者と共に顕されし如くに、前代には人の子らに示されざりき。⁶即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣^{よつぎ}となり、共に一体となり、共に約束に与^{あずか}る者となる事なり。」(エペソ3:5～6)

全部一緒だ、もう何も隔てはない。この恵みの世界に入つて、世界中の人はみんな一緒だ、と。

「¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御霊^{みたま}により力をもて汝らの内なる人を強く

し、¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、

愛を基^{もと}とし、¹⁸凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ

の如何^{いかばかり}許なるかを悟り、¹⁹その測り知る可^べからざる愛を知ることを得しめ、

凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を。」(エペソ3:16～19)

「知る」というのは頭ではない。感得すること、身体で感ずることです。凄いことを書いてるよ、パウロは。満ち溢れてしまうんだ。

福音の世界で、「知る、悟る」ということは全存在^{みづか}で受けとることです。知るといふ言葉はすぐ知的に響くから困る。

「……御霊の賜う一致を守れ。」(エペソ4:3)

一致を守れといったって、もう一致せざるを得ないです、あなた方一人ひとり、聖霊がくれば、賜物^{たまもの}は様々だ、いろいろだ。才能や賜物は一人ひとり違う。違わなければおもしろくない、同じでは。全体主義ではないんだから。但し、十字架と聖霊だけは、これはみな一つ。

十字架と聖霊、円「○」の中に「十」、これは我々の信交^{しんこう}の徴です。十字架が本当なら、ここに「○」(聖霊)が書かれざるを得ないんです、光の円が。それが使徒たちの信交の現実、キリストの直弟子の信交の現実なんだ。だから、「使徒的信交」と、しよつちゆう言っている。

「プロテスタントでもカトリックでもない。キリストの直弟子の次元に行け。新約

聖書だ。新約聖書の文字となれ、体現せよ」

と。楽しいでしょ、あなた方。楽しくないかい? こういうことを聞いていて。

「楽しくてしょうがない。それでなければ、生きていられませんよ」

と、こういうことになる。

●キリストという実体をいただく

だから、私は、歳なんか考えていない。88歳だろうが、何だっていい。いつ仆れるか、そんなことは全然考えてない。ただ88がおめでたいのではない。88にこもるところの、こ



のキリストの生命がおめでたいんだ。私も若くなりたいけれども、いいよ。私は永遠の青年だから。

普通は「わが信仰」と言っていると勢いが良さそうだけれども、下向きの放物線になってしまふ。わが信仰ではない。「汝の信を」と言つて、キリストの信をいただと、逆カーブになる。天界に向かっていく。我々は逆カーブで動いているんだ、いいよ。聞いているうちに力が来ないですか？ 来たでしょ。そういう、

「その愛のいかにかりなるかを」

とは聖霊の愛です。コリント前書13章の愛だつて、これは御霊の愛ですから。

「この愛がなかったら、この御霊の愛がなかったら、他のことがどんなに良さそうだって、ダメだぞ」

と。ということ、愛は具体的にはキリストということです。キリストは愛の権化、愛の実体だから。キリストについて語つたつてしょうがないんだ、その実体をいただかなければ。

「私はいただいてますよ。だから、ありがたいです。先生、そのとおりです！」

と、皆さんも、

「その通り！」

と言つてくれなくては。みんな、黙っているけれども。

私は「先生」でも何でもない。「後生」でいいよ。しんがりで行くからね。あなた方は天国に先に行つて、私はしんがりで行つて、それから、天国の門を最後に閉めてあげるから。遅れるなよ(笑)。遅れないでくださいよ。

「召団の皆が中に入ったから、神さま、今度は閉めさせてください」

「お前、ちよつと待て」

なんて言われるかも知れない。

「それじゃ、待つてます」

なんて。

「極楽だか何だか知らないけれども、私はかく信ぜざるを得ない」

というのが親鸞の言葉でしょ。ああいう言葉を書いているから、バルトがびつくりしたんだ。『歎異抄』を読んで、

「こういう信仰があるか」

と言つて、世界の大神学者がびつくりした。大論文をよくもあれだけ書いたもんだ。あれだけ全部読んだ者がいるかと思うくらい。あんなたくさん書いていながら、バルトは何と言つたかという、

「いや、こういう書物よりも大事なのはキリストを伝えることだ。本当の説教の方が大事なんだ」

と。さすがはバルトだ。とにかく、ドイツには凄いやつがいる。中国でなくて、ドイツが



隣りだったら良かったね。

●キリストの活ける作品

大体、「主義」なんてものはダメです。すべての主義は或る真理性はあるけれども、限界がある。主義を越えなければダメなんです、福音の世界は。だから、

「私が言うのは、今いわれているような無教会ではないぞ」

と内村先生が言ったのは、さすが内村先生は幅がある。突き抜けているから。「召団」はひとつも主義がない。垣根がないですよ、この召団は。

あまり気にするなよ、いろんなことを。一つの焦点をジッと見て、その光を受けとって進んでいくことだ。そうすると、そこから無限に展開するから。本当にそれは真理です。そういうことのできたのは、大詩人ゲーテです。ゲーテが凄いというのは――やはりケタが違うです――自然におけるその神の栄光の姿、神の光を見ている。もうケタが違う。

日本の漱石さんは、文学としては素晴らしいけれども、なお一つのこと足らない。本当の底力が足りない。ユーゴだとか、ドストエフスキーだとか、ゲーテだとか、シェイクスピア、ブラウニング、ブレイク、ミルトン、やつぱりああい一流の人たちの中には福音が溶けている。

とにかく、一番大事なのは、あなた方一人ひとりの、存在そのものがキリストの活ける作品となること。これが身証しんしょうです。そういうのは天国でちゃんと迎えられる。これが人生の目的です。

その目的の中心となるのは、

「父の全きが如くなれ」

というのは、ルカ伝では、

「父の慈悲なるが如くなれ」

という。全きというのは完全性なんです。完全性というものは無限なものをもっている。

「キリストの慈悲なるが如く慈悲なれ」

と。慈悲でも愛でも何でもいいよ、憫あわれみでも。

「憫いけにえみを好みて、犠いけにえ性を好まず」

と。いわゆる「犠いけにえ性」とキリストがあの方に言ったのはいろんな宗教的行事のことを言っているんです。

「宗教的行事なんか問題ではないんだ」

ということ。本当に人を憐れむか。喉が渴いた時に水を飲ましてやったか。寒がっていたら、衣を脱いでやったか。

賀川豊彦は本当にそれをやったんだ。自分はボロを着ている。あまりボロを着ているからといって、賀川豊彦に新しいのをやったら、またそれも人に遣ってしまった。底抜けの



愛だね、賀川豊彦というひとは。労働者が苦しめられているから、そのために労働運動を始めた。決して、いわゆる社会主義的運動ではない、賀川豊彦の運動は。不当な事に対する愛の怒なんです。

●聖書を読みながら祈りの世界に入る

パウロは「奥義」「ミステリオン」のことをよく言っている。奥義の内容は何かというと、必ず愛が中心です。本当の生命の質は愛なんです。相手を救い上げる、人のために犠牲となる。

「己のために己の生命を得んとする者はこれを失い、我がため福音のためにこれを失う者は反って得る」

とキリストが言ったのは、そのことだ。

とにかく、聖霊が来ると――これは太陽の光ではなくてキリストという霊界の光だから――キリストを受けとつたら、

「汝らは世の光なり」

という。これは、

「私が光だから、私を受けとつてごらん、そうしたら、お前たちは世の光になる。

どんなに嵐が来たって消えないよ」

と、そういう光なんだ。

そういう角度で、聖書を読んでごらん。楽ではないよ。注解書は要らない。楽しくてしょうがない。新約聖書くらい楽しい本はなくなってしまふ。読んでいるうちに力があるから。読んでいることが直ちに、即、祈りなんです。読みながら、祈りの世界に入ってしまう。キリストの中に入ってしまう。

中世の神秘家がなぜ雅歌書が好きかというと、雅歌書はまるで男女の恋物語みたいな所だ。普通の恋愛文学の元祖みたいな文学だ。ところが、中世の神秘家は、あれをキリストの愛と自分との関係において読んでいる。その一番素晴らしいのは、サンクト・ベルナル(1090～1153)という人です。あの人は、その意味で雅歌書を読んでいる。

「雅歌書が本当の福音だ」

なんていう。自分が「シユラミの女」になって、「牧者」がキリストなんだ。そのようにしてあれを読んでいる。だから、本当に信じ交わっている世界なんだ。

「神秘」という言葉を嫌って、

「信仰は神秘でない」

なんていう。そうじゃないよ。本当の信交の世界は驚くべき神秘の世界です。「クリストウス・ミステイク」「キリスト神秘」の世界です。いつかダイスマンの『パウロ』という本を読んでごらん。訳本もあるから。私は原文で読むんだけど。あれは素晴らしい。その世界をちゃんと捕まえている。

